

看護師のしごととくらしを
豊かにする

4

看護師のための 松陰流人材育成術

吉田松陰が松下村塾で教えたこと

長谷川 勤



日本医療企画

(C) 2018 日本医療企画.

はじめに

珠玉の人材を育て上げた松陰の人材育成法

吉田松陰よしだしょういんの生きた、天保年間から安政年間（一八三〇～一八六〇年）は、欧米先進国が第一次産業革命を成し遂げ近代国家へ成長を遂げていく時代でした。当時の日本は徳川政権の矛盾が顕在化して苦悶していた時期であり、やがて欧米諸国による日本や清国、琉球への開国要求が現実の問題となってきます。日本にアヘン戦争の情報がもたらされたのは、老中・水野忠邦みずのただくにが天保の改革に四苦八苦しているころでした。吉田松陰は、毛利藩の軍学師範として海防問題に思いをめぐらせていましたが、ペリーの黒船が浦賀に來航して開国を強要、国内は混乱しました。

西欧の圧倒的な軍勢力を目のあたりにした松陰は、海外渡航が禁止されていることを承知で、米国の国情視察を敢行するため黒船に乗りこみますが、失敗して自由を失います。しかし日本の行く末を憂慮した松陰は、望みを捨てることなく幽囚の身でありながら、精一杯の努力をこころみました。

藩の牢屋では仲間たちと勉強会を開き、出獄後は松下村塾しやうかそんじやうを主宰して、人材育

成に心血を注ぎます。軍学修行時代の大量の読書で蓄えた豊富な知識を活用して、教育活動に意欲を燃やしたのです。松下村塾で学んだ若者たちが日本のために立ち上がったのは、松陰の愛国心と教育への情熱の成果といつてよいでしょう。そうして幕末の動乱の中で活躍する若者たち、さらに明治日本の指導者に成長していく多くの人材を育成して、松陰は国のために散華しました。刑死の前日に書き上げた『留魂録』^{りゅうこんろく}は、門下生への志の継承を願って書かれたものです。

この本は、そうした松陰の生涯から、現代まで脈々と生き続ける人材育成のあり方について看護師である皆さんと一緒に考えていこうと思ひながら書きました。現代社会が求める人材をどう育成するか、そして自己教育のあり方にも思いを寄せ、人が職業人として生きていく上で大切な教えも紹介できればと思ひます。

松陰の残した文章は今から百五十年以上も前のものなので、表現が少し古い感じがするかもしれません。しかし、味わいのあるすばらしい教えや言葉の数々は、今日でも光り輝いています。志を曲げない生き方や、逆境にあっても屈することなく努力前進を自分に課す松陰、そして教師と門下生が心をひとつにして学問に励む松陰先生の姿に、読者の皆さんが何かを感じてくだされば幸いです。

長谷川 勤

目次

はじめに

― 珠玉の人材を育て上げた松陰の人材育成法 ― 3

1 思想家・吉田松陰とはどんな人だったのか？

13

● 吉田松陰が私たちに教えてくれること 14

● 後の日本を牽引する指導者を松下村塾から輩出 15

● 六歳で吉田家の当主となり山鹿流兵学を学ぶ 16

● 九州や江戸への遊学で西洋兵学、軍学、海外情勢を学ぶ 18

● ペリーの黒船に乗りこみ密航を計画、松下村塾で教え始める 19

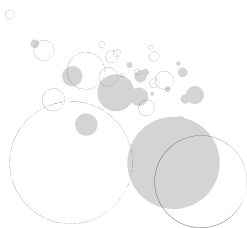
● 老中の暗殺計画が頓挫し、安政の大獄で死罪に 20

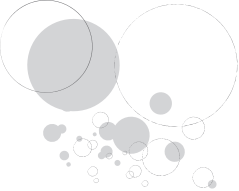
〔年表〕吉田松陰の生涯 22

2 看護の現場に生かす、松下村塾の人の育て方

23

- 仲間たちと勉学の目的を共有し、自主性と向上心をもって、職務に取り組む 24
- 「知行合^{ちこうごう}」の教えを身につけ、職業人としての尊敬と信頼を得る 26
- 弟子たちの個性を見抜き、その進歩を激賞して、「やる気」を引き出す 30
- 師と弟子がお互いに教え合い、ともに学ぶ「師弟同行^{していどうこう}」の教育 34
- 各人の個性を見出し、愛情をもって、巧みにその個性を伸ばす 36
- 「志」を立てることを最も大切にし、それを身をもって実践した 40
- 学問のめざすものは、人とは何たるものかを学ぶこと 44
- 読書で得た知識をさらに深く自分のものにするために「討論」を活発に行った 46
- 身分を問わない、「横」のつながりを大事にした平等主義の教育 48
- 学問のみならず、協同作業も師弟同行で行う、集団教育の実践を取り入れた 50
- 弟子たちに、愛情と期待のこもった激励文を書き与えた（送叙文を贈る） 54





- 各地からの情報を工夫して収集し、それを共有して、その情報を教育に活用した 58
- 『留魂録』りゅうこんろくという遺書によって、自分の教育を完成させた 62
- 短所の矯正よりも、長所を伸ばすことに重きをおいた、高杉晋作の育成方法 64
- 誰にでも平等に接し、人間愛にあふれる教育を行った 66
- 「お勉強なされい」とやさしく語りかけ、温かく見守った 70
- 教材は先生が選び、塾生にも選ばせて、その成長を喜んだ 72
- 塾生の人間的成長とともに喜び、それがさらなる成長を促した 74
- 自分の睡眠時間よりも、深夜に訪ねてくる塾生の勉強を優先した 76
- 塾生の理解度を高め、自身の進歩を実感できるよう、読書の方法を工夫した 78

「コラム」メディアに登場する吉田松陰 80

3 看護師の心に響く松陰の名言20

81

名言1

凡およを生まれて人ひとたれば、宜よろしく禽獸きんじゆうに異ことなる所以ゆえんを知るべし。

82

名言2

志いざを立てて以もつて万事ばんじの源みなと為なす。

84

名言3

人賢愚ひとけんぐありと雖いえども、各々一二の才能さいのうなきはなし。

86

名言4

凡およそ人の子ひとこのかしこきも、おろかなるもよきもあしきも、大たいてい父母ふぼのをしへに依よる事ことなり。

88

名言5

杉すぎの家法かほうに世よの及およびがたき美事びじあり。

90

名言6

境さかい、順じゆんなる者ものは怠おたり易やすく、逆境ぎやくきやうなる者ものは励はげみ易やすし。

92

名言7

学問がくもんの大禁忌だいきんきは作輟さくてつなり。

94

名言8

仁じんは人ひとの心こころなり。義ぎは人ひとの路みちなり。

96

名言9

万巻まんかんの書しよを読よむに非あつざるよりは、寧いづんぞ兆民せうみんの安やすきを致いたすを得えん。

98

名言 10

至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。

100

名言 11

平生の学問淺薄にして至誠天地を感格すること出来申さず、
非常の変に立ち到り申し候。

102

名言 12

地を離れて人なく、人を離れて事なし、人事を論ずる者は地理より始むと。

104

名言 13

知は行の本たり。行は地の実たり。二つの者固より相倚りて離れず。

106

名言 14

凡そ聖学の主とする所、己を修むと人を治むの二途に過ぎず。

108

名言 15

学は人たる所以を学ぶなり。塾係くるに村名を以てす。

110

名言 16

書は古なり、為は今なり。今と古と同じからず。

112

名言 17

一時の屈は万世の伸なり、いづくんぞ傷まん。

114

名言 18

今年の抄は明年の愚となり。明年の録は明後年の拙を覚ゆべし。

116

名言 19

吾れ今国の為に死す、死して君親に負かず。

118

悠々たり天地の事、鑑照明神に在り。

名言 20

死は好むべきにも非ず、亦惡むべきにも非ず、
道尽き心安んずる、便ち是れ死所。

120

卷末付録 吉田松陰と松下村塾の弟子たち

123

高杉晋作

— 奇兵隊を創設した尊王攘夷の志士 —

124

久坂玄瑞

— 松陰に最も評価された、尊王攘夷そのうじょういの中心人物 —

128

伊藤博文

— 倒幕活動に身を投じた日本の初代内閣総理大臣 —

132

山縣有朋

— 倒幕活動ののち、陸軍の重鎮に —

136

桂小五郎

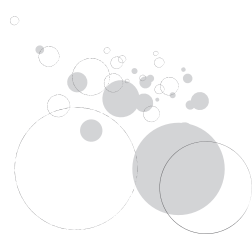
— 伊藤博文を育てた維新の三傑 —

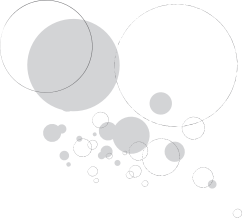
138

楫取素彦

— 生涯にわたって杉家を支えた義理の兄弟 —

140





おわりに

— 私たちに多くの教訓を与えてくれる、松陰の言葉 —

142

※本書は、原文（読み下し）どおりの吉田松陰の言葉を掲載しています。
そのため、漢字や送り仮名など、現代の言葉と少し違うものもあります。

2

看護の現場に生かす、
松下村塾の人の育て方

仲間たちと勉学の目的を共有し、 自主性と向上心をもって、 職務に取り組む

松陰は学問の目的や、取り組みにあたつての考え方をとても大切にしました。とりわけ、「志」を持つことが何よりも大切と考えていました。松陰流の表現で言えば、「学問は志に始まる」ということになります。

ですから、入塾希望者に対して「あなたは何のために学問をするのですか？」と学問の目的を問いかけてました。これは今でいう、面接試験のようなもので、ここから塾生の勉強がすでに始まっていることになります。

松陰はこの時点で入塾希望者の人物評価をしていたのですが、人間に対する洞察力の鋭かった松陰はそのような胸の内を見せることなく、優しく諭すように話したといえます。「自分が学んだことは、それが実際に役立ってこそ意味がある」のだと。

そうした考え方でしたから、「ともに学ぼう」と呼びかけるような形で入塾希

望者を受け入れました。そして松陰は、学問にのぞむ際の自主性をたいへん重視していたので、自分が学んだことを仲間たちと議論させる方法を積極的に取り入れました。

人は目的が明確になっていると、その達成に向って努力するものです。ですから、苦楽をともにする思いを込めて「志をもって、ともに学びましょう」と語りかけたのでした。

看護師の職務をまっとうするには、まずその専門家をめざすことが第一目標、志となるでしょう。職業人としての毎日の職務を果しながら実務経験を積むなかで、総合的な学びがより高次元のものになり、看護に対する情報や判断が的確なものになって、やがて医師や患者さんたちの信頼を勝ち取ることができるのだと思います。

まずは、向上心をもって先輩看護師や医師との共同作業を重ねるなかで、自身成長していくこと。そうして初めて、適切な判断にもとづく医療行為が可能になるのでしょうか。

「知行合ちこうごういっ」の教えを身につけ、 職業人としての尊敬と信頼を得る

吉田松陰の松下村塾における教育的手法は、学問の目的を明確にして、師と弟子がともに学び合いながら成長していくというものでした。そして松陰は、「学者になつてはいかぬ、人は実行が大切である」として、学んだことの成果が実際の人生に生かされなければ意味がないという実学の考え方を教えました。

そんな松陰でしたから、学問のための学問は否定するという考え方でした。松陰は江戸に修業に行ったとき、「江戸の学者は知識を切り売りしている」と、大きな不満を持ちました。そして世の中の動静に対して全く無関心である学者の姿に、失望を覚えたのでした。「知行合ちこうごういっ」の教えに賛同した翌年のことですから、なおさらに残念な思いを抱いたのでしょう。

この「知行合ちこうごういっ」とは、陽明学ようめいがくの教えです。陽明学を提唱したのは、中国の明の時代の思想家であり、高級官吏でもあった王陽明という人です。王陽明の思想

は、門下生との問答録の『伝習録』^{でんしやくろく}としてまとめられ、日本でも出版されています。

しかし江戸時代は、朱子学（中国、南宋の朱熹^{しゆゐ}が大成した新しい儒学）が官学として保護され、幕府に推奨されていたので、陽明学は一部の知識層にしか普及しませんでした。

松陰が陽明学に出会ったのは嘉永三（一八五〇）年、平戸藩の家老であった葉^は山佐内^{やまさない}という人物の下で修業をしたときでした。このとき松陰は二十四歳でしたが、筆まめな松陰はこの半年間の修業期間のことを『西遊日記』^{さいゆうにっき}に克明に記録しています。松陰は平戸に到着したその晩に、早速、葉山佐内から『伝習録』を借り受け、熱心に読んだそうです。

少し話が脱線しますが、この陽明学は、多くの幕末の志士に影響を与えました。有名なところでは、西郷隆盛、大塩平八郎（江戸時代後期の陽明学者。大坂町奉行所の与力として活躍したが、のちに天保の飢饉の際、民衆救済のための乱を起こした）などが熱心な信奉者として知られています。

昭和に入ってから、作家の三島由紀夫が『革命哲学としての陽明学』という本を書きました。三島由紀夫もまた、陽明学の信奉者の一人といえるでしょう。昭和四十五（一九七〇）年十一月二十五日の陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地での割腹自

殺は、まさしく陽明学の影響だったのではないでしょうか。

陽明学は学んだことを信じて、「行動の実践」に結びつけるというところに特長があります。少し難しい表現ですが、これは「主観の完全燃焼」と言い換えることができます。自分の信念をゆるがせにしない生き方をする、ということです。ときにその行動は死をも恐れないという一面があります。幕末の動乱期は、このような命懸けの事態の連続でした。松陰が、国禁を犯してまで密航を企てた背景には陽明学の影響があったといえるでしょう。

平戸で陽明学を学んだ松陰は、松下村塾の塾生に「知行合一」という考えを日々の学習の中で自然な形で教えていきました。松陰は、普段の何気ない生活の中で、いつも「言行一致（げんこういつち）（口で言うことと行動とに矛盾がないこと）」の行動をとる自分の姿を弟子たちに見せました。

そんな師の姿を見た塾生は、松陰に対する信頼を深めていきました。そして松陰は、さらなる塾生の人間的成長を願って教育を行いました。塾生の成長度合いや能力を見極めながら、適切な教材を選んで読ませ、一人ひとりに課題を持たせて、自分で考えて解決するという能力開発を行ったのです。

そうして読書が終了すると、一緒になって議論し合いました。このように松陰の教育は、一緒になって学び、その議論の中から塾生に何かを学び取らせるとい

う自主性を重んじたものでした。

読者の皆さんは陽明学と聞くと、いかにも難しい学問のような印象を持つかもしれませんが、その教えはシンプルに考えれば「知識と行動」の一体的な調和を説いているものです。学んで得た成果とその行動が、人間的な成長を促す建設的なものであれば、それでいいのです。必ずそれは、他者への貢献につながるはずです。

この「知行合一」の考えを理解して身につけていただければ、どんな仕事であっても職業人として尊敬と信頼を得ることができるでしょう。また、部下や患者に寄り添った行動や態度が、機敏にとれるようになるのではないかと思います。ちなみに筆者の勤務する松陰大学は、「知行合一」を校是・建学の精神に掲げており、「吉田松陰論」という珍しい履修科目が設置されています。看護学部もあり、この学部では吉田松陰論は必修科目になっています。

看護学生の皆さんは、一生懸命、この科目を勉強します。筆者は、吉田松陰を学んだことが、やがて看護師としての実務に役立つことを願いながら、学生とともに学んでいます。吉田松陰の足跡からは、まるで汲めどもつきない井戸のように、たくさんの教えがこんこんと湧き出てくるのです。

弟子たちの個性を見抜き、
その進歩を激賞して、
「やる気」を引き出す

門下生の多くは、勉学の機会を願いながらも藩士のように藩校（江戸時代に諸藩が藩士の子弟の教育のために設けた藩の直轄学校。吉田松陰の毛利藩の藩校は、明倫館めいりんかんという西日本の名門校）で正規の学問を学ぶ機会を与えられませんでした。

藩校では、幕府の政策もあつて判で押したようにどこの藩でも朱子学を教えていました。藩士の子弟は、論語に始まる『四書五経』（朱子学の聖典とされる、儒教の基本書。『論語』『孟子』『大学』『中庸』を四書といい、『詩経』『書経』『礼記』『易経』『春秋』を五経という）を主に学んでいたのです。

これに比べて商人や足輕、中間（最下層の武士）や陪臣（武士の家来）といった身分の低い人たちは、寺子屋（江戸時代の庶民のための初等教育機関）や私塾で学んでいましたが、松下村塾のように人間教育を理念として運営されてはおら

ず、日常生活上の必要な知識を授けることに主眼をおいたものでした。いわゆる「読み・書き・そろばん」ですね。

松下村塾の出身者の回顧談では、「当時、松陰先生の評判がよくて、よい仕事にも就けるかもしれない」と期待しながら入塾をお願いに行ったと回想されています。私塾というと、気軽に学べて敷居の高くない教育機関というイメージがあつたようです。

松陰は、入塾希望を申し出てきた若者と机を並べて、時にマンツーマンで懇切丁寧に、そして時に厳しく指導を行いながら一緒になって勉学に取り組んで、塾生の学習意欲を鼓舞しました。

陽明学では「じじょう事上磨錬」といって、日々の生活の中からのことを学ぶことを重視しました。人間の日常生活、あるいは実社会に役立つものが松陰の考えていた学問でした。ですから松陰が最も大切にしていた「志」を立てたら真剣に学ぶことを、師が先頭に立って勉学に励む姿で見せたわけです。

松陰の教育力の源は、人生の実際に役立たなければ勉学とはみなさないという考え方と「そつせんすいはん率先垂範（先頭に立って模範を示すこと）」の態度で、真剣に教育に取り組み、塾生の進歩を褒めて一緒に喜ぶところにありました。

そして松陰は、塾生一人ひとりの個性を見抜いた上で、各人にふさわしい「あざな字

(実名のほかにつけた名前)」を贈りました。ここで塾生につけた字のエピソードをひとつ紹介したいと思います。

松下村塾の初期の頃に入塾した吉田稔磨よしだとしまろという人物がいました。この青年と話しているうちに、松陰はこの人物の将来性を高く評価するようになっていきました。

そこで彼の大成を願って「無逸むいつ」という字を贈ります。このまま向学心に燃えて勉学を続けていけば、彼の将来はきつと明るいに違いない。しかし惜しむらくは、彼には自分の才に頼りすぎるところがあると判断して、油断を戒めることを意味する「無逸」という字を贈ったのです。

成長の「機会を逸する」ことのないようにという願いを込めて、松陰は彼に丁寧に説明します。そうすることによって、稔磨の才能に磨きがかかることを期待したのです。

このように説明を受けた稔磨はもちろん納得して、さらに高いレベルをめざして勉学に励みます。果して、彼は後に「松下村塾の四天王」の一人としてたくましく成長しました。松陰の稔磨に対する期待と愛情は並々ならぬものでしたが、それに応えてくれた門下生の姿をみて松陰は、わがことのように喜びました。

「松下村塾の四天王」とされる、久坂玄瑞くさかげんずい、高杉晋作たかしんさく、入江杉藏等いりえすぎぞうに対する期待

と愛情の注ぎ方も同様でした。このように松陰が塾生の将来に期待し、塾生がその期待に応えるという、師弟間の心の交流と信頼感は強い絆となり、門下生の「やる気」を倍増させました。

ここに松陰の天性ともいえる、教育者としての優れた一面を見ることができ、ます。尊敬する師から自分にふさわしい字をつけてもらえることは、師に認められたいという、塾生の承認の欲求を満たすことになります。

こうした師の思いやりの行動は、塾生に感謝と信頼に満ちた尊敬の念を喚起させます。吉田松陰という人は、このようにして塾生の心をつかみ、塾生の進歩や成長を確認すると激賞してあげるのが常でした。それが「やる気を引き出す」松陰の教育技術だったのです。

このように心の通いあった師弟関係を巧みに活用した松陰の教育手法から、看護師としての職務に取り入れられること、学ぶべきものは多いのではないでしようか。

数少ない秀才を除けば、人の能力には、それほど大きな差はありません。大切なことは目標をしっかりと見据え、目標達成に向けて、いかに真剣に取り組むかです。看護師の皆さんも看護師同士、あるいは病院のスタッフと切磋琢磨せつさくまして、向上しようという意欲を高く持ち続けていただきたいと思います。

おわりに

私たちに多くの教訓を与えてくれる、松陰の言葉

吉田松陰は思想家、教育者として取り上げられることが多いですが、最も知られているのは松下村塾の主宰者としての教育者像です。それが松陰の悲劇的な生涯の結末と相まって、人気の秘訣となっているようです。野山獄のやまごくという萩藩の牢屋に入っていた一年二か月の間に読んだ本が、『野山獄読書記』のやまごくどくしよきとして、吉田松陰全集に収載されていますが、松陰は大変な読書家であり、また筆まめな人でした。六百三十通を超える手紙も遺されています。

伝記については、明治二六年の徳富蘇峰とくふそほうの『吉田松陰』が書かれて以来、おびただしい数の研究書や解説書が出ています。また手軽に勉強できるのは松陰の遺した名言に関する本といってもよいでしょう。最近では松陰の遺した名言集や松下村塾での教育活動を取り上げて、彼の考え方や生き方、あるいは行動などの解説をした本が目につきます。

本書も、看護を仕事とする人、そしてさらにすばらしい看護師を育成したいと考える人たちに役立つことを願って、名言や教育の手法を私なりにまとめてみま

した。松陰の本には、「心を打つ」とか「魂を揺さぶる」といった題名の本が多く見られます。百五十年以上前の松陰の言葉は、色あせるどころか、ますます光を放っているのです。それだけ松陰の生き方や考えが深く、磨き抜かれたものであり、不思議な説得力をもって現代に生きる私たちに語りかけてくるからでしょう。「志を立てて以て万事の源と為す」や「学は人たる所以を学ぶなり」などの名言はその端的な例でしょう。

これらの単純明快で要所をついた言葉は、現代に生きる私たちに多くの教訓を与えてくれます。松下村塾での教えや「教えることはできないが、一緒に学ぶことはできる」という入塾希望者への言葉には、謙虚で誠実な松陰の人となりがいめじられます。教育の名手であった吉田松陰を学びながら、自己教育や人材育成のノウハウをこの本から読み取っていただければ、著者としてこれにまさる喜びはありません。

おわりにあたって、私の身勝手なお願ひにもかかわらず看護師長の経験談を提供してくれた深澤寛子さんの協力や、執筆にあたりご助言いただいた編集スタッフの皆さんにも大変お世話になりました。記して謝意を表します。

長谷川 勤

●著者略歴

長谷川 勤 (はせがわ・つとむ)

昭和21年9月3日、群馬県勢多郡黒保根村（現桐生市）に生れる。中学卒業後、鎌倉市の電機会社に就職し、翌年から定時制高校に入学。在学中、大学の入試要項を見て進学を念願、大学受験を目標に都立高校へ転校して卒業。同年、早稲田大学社会科学部に入学。在学中は経済学を学びながら高校教諭の免許も取得して、卒業後の昭和46年4月に株式会社三陽商会に入社し、平成18年12月に同社を定年退職。在職中、慶應義塾大学通信課程に入学し、文学部史学科に在籍して主に近代日本史を学ぶ（中退）。この間、早稲田大学の大学院に科目等履修生として1年間在籍してさらに近代日本史を研究する。会社員を定年退職後、松蔭大学にて非常勤講師として「吉田松陰論」を担当する。平成25年4月より同大学客員教授。各地の市民大学講座や講演も多数こなし、幕末から明治維新を主題として行う。平成27年、NHKラジオ講座「歴史再発見」で「松陰と幕末・明治の志士たち」を担当。

編集協力 株式会社オメガ社

装丁 櫻井 ミチ

本文デザイン・DTP 株式会社オノ・エーワン

看護師のしごととくらしを豊かにする④

看護師のための松陰流人材育成術

吉田松陰が松下村塾で教えたこと

2018年3月26日 第1版第1刷発行

著者 長谷川 勤

発行者 林 諄

発行所 株式会社日本医療企画

〒101-0033 東京都千代田区神田岩本町4-14

神田平成ビル

TEL03-3256-2861（代）

FAX03-3256-2865

<http://www.jmp.co.jp>

印刷所 大日本印刷株式会社

© Tsutomu Hasegawa 2018, Printed and Bound in Japan

ISBN978-4-86439-627-1 C3030

定価はカバーに表示しています。

本書の全部または一部の複写・複製・転写等を禁じます。これらの許諾については小社までご照会ください。

(C) 2018 日本医療企画.